



2023年
被昇天号Web版



発行所
カトリック高幡教会
あゆみ編集委員会
TEL042(592)2463

メキシコのお土産話し

主任司祭 ホルヘ・マヌエル・マシアス・ラミレス

皆様はご存知だと思いますが、私は五年ぶりに休みを取って、メキシコへ行ってきました。そして、司祭として初めて、メキシコでミサの司式をすることになりました。

この旅行は、休むことよりも、私の信仰と司祭としての使命を新たに叙階の役に立ちました。私は、司祭の叙階のときに、私の司祭としてのあゆみを、司祭たちの母であるマリ「グアダルペの聖母」に委ねましたので、メキシコ「シテイ」にあるグアダルペの聖母の大聖堂へお祈りに行きました。

グアダルペの聖母は一九三一年十二月九日から十二日まで五回出現したマリヤ様です。

聖堂は三つあります。一つ目は一六六六年に建てられました。二つ目は一六九五年か一七〇九年にかけて建てられた大聖堂。三つ目は、建設は一九七四年に始まり、落成は一九七六年十月十二日までかかった、一万人も入ることが出来る、円形に建てられた現在の大聖堂です。

グアダルペの聖母の絵の象徴性は興味深いもので、メキシコの民族の優しそうな若い女の子の顔を見るこ



グアダルペの聖母



グアダルペの聖母の大聖堂

聖母の位置と同じ四十六個の星で飾られていきます。テペヤックの丘でのマリヤの御出現の時、バラが非常に重要な役割を果たしました。聖母は聖フアン・デ・イエゴに、丘に登ってスペインの力

とができます。ゆるやかなウェーブの髪は栄光のある女性の象徴でした。太陽の光が彼女のお腹に反射し、子供の誕生を告げています。引き締まったように見える黒いリボンは、先住民族の妊娠した女性のしるしです。



一つ目の丘の上の聖堂



三つ目の大聖堂



二つ目の大聖堂

私は、グアダルーペの聖母の大聖堂でミサの司式をしませんでしたが、この教会と、そして、メキシコ教区のカテドラルと、私の郷里であるグアダハラハラ教区のカテドラルで祈り、皆様の為にも祈りました。



高さ二十三メートルの鐘楼

ステイリーヤのバラと同じようなバラを切るように頼んだのです。また、グアダルーペの聖母の衣装には、花びらの数が異なるいくつかのバラの花が描かれています。そしてロサリオの祈りは、マリヤ様に五十本のバラを捧げることを意味しています。高さ二十三メートルの鐘楼には四十八個の鐘が付いています。鐘楼には、アステカのカルンダー、天文時計、太陽時計、リアルタイムの時計と、四つの時計があります。



メキシコ教区のカテドラル





グアダラハラ教区のカテドラル

この度の旅行は、巡礼を目的とし、このメキシコの有名な教会を三つ訪問することにいたしました。信仰を新たに、家族に会い、瞑想と休息の時となったと同時に、高幡教会の司牧活動が続ける強い気持ちで新たなことをできた機会になったと思えます。†



ホルヘ神父様の出身教会

私の郷里、グアダラハラにある私の所属教会、聖十字架教会で、私はミサの司式をしました。この教会の主任司祭は、私が小神学校の時の同級生で、今年四月からこの教会の主任司祭をしています。

五月二十八日にはカテドラルで行われた合同堅信式で二名の方が堅信を受けられました。また、初聖体を六月十一日に三名と後に一名で合計四名のお子様におられました。おめでとうございます。教会全体で喜びたいと思います。復活尚、復活祭には四年ぶりに「復活のたまご」を約200個用意いたしました。

●入信の秘跡について
復活祭徹夜祭には成人二名と子ども一名の計三名が受洗されました。三月十一日にも一名の幼児洗礼があり、合計四名の方が洗礼を受けられました。

今回は四月から七月までの教会委員会だよりを記載します。三月に入り、復活祭には新しいミサ曲を皆で歌おうと言うことで練習に励みました。コロナ禍で出来なかつたことが復活祭を皮切りに徐々に出来るようになり喜びの三ヶ月間でもありました。

教会委員会だより

教会委員会 委員長



新オルガンを祝別される神父様



ミニ・コンサートの様子

● **新しいオルガン**
 喜びのイベントが次々に出来ま
 した。先ず、新しいオルガンの披露宴
 です。五月十四日に皆さんから献金
 をいただき、長年一緒にミサに与つ
 たオルガンを新しいオルガンに交換
 いたしました。「古いオルガン、ご苦
 労さん。ありがとうございます。また、新しい
 オルガン、これからよろしく」と言
 った気持ちになります。そのような
 気持ちもあり、「みんなで歌おう」と
 「ミニ・コンサート」を開催いたし
 ました。久しぶりに大きな声で歌い、



堅信式後、大司教様と記念写真
前列右二、三人目が当教会所属



初聖体の恵みを受ける

また素晴らしいオルガンの演奏と歌
 を聴き、思わず喉に詰まってい
 まいました。また、茶話会も行い、
 久しぶりに懇談が出来たことを感謝
 いたします。
 ● **下瀬智久神父様の高幡教会での初
 ミサ**
 レンデンプートル会の下瀬智久神父
 様の高幡教会での初ミサが執り行わ
 れました。下瀬神父様は大阪大司教
 区吹田教会の助任司祭に着任されて
 います。六月四日に高幡教会に大
 阪からお越しください。教会学校の先
 輩方も多く高幡教会に来られ、下瀬
 神父様のご活躍を皆でお祈りしまし
 た。



初ミサ時の下瀬神父様

● **初聖体**
 六月十一日の十一時ミサで初聖体
 を行い、その後お祝いのパーティー
 を行いました。子供たちは高幡教会
 の宝です。そして、これからの教会
 を背負って行っていたたく保護者と
 教会学校のリーダーの方々どうしの交
 流も出来きました。
 ● **教会の施設**
 (聖堂のエアコン、冷蔵庫)
 教会聖堂のエアコンが故障してい
 ました。気候が暑くなる前の六月十
 三日火曜日に新しいエアコンに交換
 しました。また、冷蔵庫もコロナ前
 に壊れていて、交換が必要でしたが、
 そのままになっていました。六月十
 日(土)に購入し、一階コピー機の
 横に設置しました。どうぞ、のどが
 渴いた時はご自由にお飲みくださ
 い。
 ● **大掃除**
 大掃除を久々に七月二日に行いま
 した。教会の周りの樹木も大変大き
 くなり、中々素人では手に負えない
 状況になっていきます。低木の剪定や
 花や草取り等は私達で出来ますが、
 大木は業者をお願いする必要があります
 ます。今後は施設の維持と同様に検
 討していきたいと思えます。



高幡教会初ミサの説教の時間

神との交わりに信頼して
日々のあゆみを続けましょう

六月四日、下瀬智久神父様の
高幡教会初ミサ説教

イエスキリストの御復活を祝う復活節は、ちょうど一週間前の聖霊降臨の主日で終わりましたが、私たちが今日祝っている三位一体の主日は、「聖霊降臨の一週間後の日曜日」と定められていますから、今日のお祝いも、大きな喜びである復活節の余韻を残したお祝いということになります。

教会に長く居られる皆さんであれば「三位一体」という言葉は何度も聞いて、耳馴染みの言葉だと思いがすが、それと同時に、なんだか小難しくよくわからない、という印象を持つておられる方も多いのではなうでしょうか。確かに、専門的に学ぼうとすると、アウグスティヌスだのトマス・アクィナスだのといった神学者の話しや、彼らによる三位一体論などという難しい神学の話しになってしましますが、その一方で私たちが祈る時、特にミサの始めなどで十字を切る時に「父と子と聖霊の御名によつて」と唱えることから分かるように、三位一体というのは、実はとても身近な存在でもありません。

この身近な存在であるという事について、今日の朗読から読みといてみたいと思います。キーワードとなるのは、第二の朗読の最後にある「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように」という箇所にある「交わり」という言葉と「共にある」という言葉の二つです。

第一の朗読は、モーゼに率いられてエジプトから脱出した民が、シナイ山で神との契約を結んだすぐ後の箇所です。少し遡つて説明しますと、契約を結ぶにあたって、モーゼのみが山に登る事を許されて、民が見送

る中、幕屋から出て山に登っていき、降つてこられた神から掟を刻んだ石板を授かりました。ところが、「一日は千年、千年は一日」という聖書の言葉のように時間の流れが違つていた民は、何日経つても山から降りてこないモーゼに痺れを切らして、彼はもう死んでしまったのではないかと疑い始め、自分たちで勝手に金の牛の像を作り、それを神として拝み始めてしまいます。山から降りてきてそれを見たモーゼは怒り狂つて、神から授かった石板を叩きつけて壊してしまい、すぐに金の牛の像を燃やして、これに関わった者に對して厳しい処罰を行います。それらをして終えてから、民のために神への取りなしをするために、ただひとり再び山に向かったというのが、今日の朗読の箇所になります。民の背信だけでなく掟を刻んだ石板も壊してしまふという、大きな裏切りを受けてたにも関わらず、神は降つてこられて宣言されます。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ちた者」。

ここで「主、主」というふうに二回繰り返されてるのは、神が確固たる存在として確かにそこに居られることを示す表現であり、続く「憐れみ深く恵みに富む」という箇所は旧約聖書（民々18、ネへ9:17、詩

86:15, 103:8, 145:8, エ 2:13 など)において、神の現れ(顕現)を示す定型的表現であるとともに、エジプト記における神の、イスラエルの民に対する関わり、民の裏切りや不平不満に対しても、つねに愛に貫かれていた神の姿を簡潔に示しています。

実際、契約を結んですぐ、というか今まさに契約を結ぼうとしているその時に、その契約を無視して背いた民に対して、確かにいつたんは怒りを示されたものの、こうして怒りではなく慈しみを示されるのは、人間ではなく神だからこそです。余談になりませんが、時々、どこかで聞き齧ったのか「旧約の神は裁く神で、新約の神は・・・」などとおっしゃる方がいらつしやいます。確かにそういう見方も出来なくはないのですが、今日の箇所などを読むと、そうした理解は少し偏った一面的な理解であり、実際には旧約新約聖書を通して神は、常に愛に貫かれていた方であることがわかります。

さて、こうした神の姿を目の当たりにしたモーセは、ヘブライ語から直訳すると「急ぎ、ひざまずき、ひれ伏し」という3つの動詞の連なりで示される、全能の神の臨在の前にした人間が為すべき最も適切な在り方であることがわかります。「わたしたちであって進んでください」「わたしたち

をあなたの嗣業として受け入れてください」。

エジプトから脱出した民が向かっていたのは約束された嗣業の地、神から与えられて子々孫々まで受け継がれるべき、単に自分の都合だけで勝手に売り渡したりしてはならない地です。ですから「わたしたちをあなたの嗣業として受け入れてください」という願いは、神が「わたしの宝、祭司の王国、聖なる国民」と呼ばれるものとして受け入れてください」という意味であり、先ほどのキーワードを使うならば「常に共にあって、永遠の交わりを結んでください」という意味になります。そして神はこれを受け入れて再び契約を結んでくださいました。

旧約聖書の物語は全体を通して、こうした契約を結んだにも関わらず人間は、いつしかそれを忘れて神から離れてしまうこと、そうした人々に対して神は辛抱強く、預言者などを使わして立ち返るように呼びかけたこと、何度も契約を結び直してくださったこと、何度も失敗を繰り返す度に悔い改め、赦しの秘蹟を受けたにも関わらず、また同じような失敗を繰り返すかのように人間は現実をあらわして研究者によると旧約全体では七回の契約が結ばれ、すべて人間の側の都合

で反故にされているそうです。人間同士だったら怒ってしまってもありえないことですが、こうした歴史があるにもかかわらず、今日の福音にあるように「神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛され」て、独り子であるイエスキリストの受難、復活、昇天を通して結んでくださったのが、新しい契約、つまり新約ということになります。これは、「独り子を信じるものが一人も滅びないで、永遠の命を得るため」であり、さらには、「世を裁くためではなく、御子によって世が救われるため」に御子を遣わされました。ちなみに、ここで使われている「裁く」と訳されているギリシヤ語の言葉には「分ける」という意味もあり、福音記者は実に巧みにこれらの意味を使い分けていますから、この後に続く「御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれていた」という箇所は、私たちが「裁く」という言葉から受ける厳しい断罪の意味ではなく、神との関わりが分けられている、つまり信じないことによつて、御子を信じ、神と共にある人と神とのあいだにある交わりから分けられて、神から離れてしまつていくという意味になります。皆さんよくご存知だと思いますが、こうした神から離れてしまつた状態のことを、私たちは「罪」と呼んでいます。

そして、こうした罪の状態にある人
 に対しても、神は慈しみをもって、
 立ち返るよう常に呼びかけておられ
 ることは、いうまでもないことです。
 このように、私たちの信じている
 神は唯一であって、父と子と聖霊の
 交わりです。常に共にあって交わり
 の中にあります。そして、その共に
 ある交わりの中に、私たちをも招い
 てくださっている、というのが今日
 の朗読箇所だけでなく、多くの学者
 たちによる難しい三位一体論につ
 ての長い歴史のある議論が見出し
 結論の一つです。こういうふうな理
 解するならば、難しそうな三位一体
 論という神学にも、少しは親しみが
 持てるのではないでしょうかと。
 第二の朗読にあるように、この三
 位一体の神は「愛と平和の神」であ
 り、世の終わりまで、つねに共にい
 てくださる神です。私たちが自分の
 意思で離れていかない限り、この交
 わりが切れてしまう事はありません
 ん。私たちはこうした神との交わり
 に信頼して、日々のあゆみを続けま
 しょう。パウロがコリントの教会の
 人々に二通の長い手紙で呼びかけた
 ように、「互いに励まし合い、思いを
 一つにして」歩み続ける事が出来る
 よう、共にいてくださる神に信頼し
 て、祈りを続けましょう。✠

教会のオルガンについて

I・I

今年五月二日に新しいオルガンが
 聖堂に入りました。これからミサを
 共にしていく教会四代目のオルガン
 になります。これを期に、今まで私
 たちの祈りを支えてくれた歴代のオ
 ルガンについて、五十年の歴史を振
 り返ってみようと思います。
 一九七〇年、メルセス会修道院の
 建物が一野に落成した時に高幡教会
 は豊田教会の分教会として生まれ、
 日曜日毎のミサは修道院の聖堂で
 われていました。その時は足踏み式
 の小さなオルガンをシスターが弾
 て下さっていました。もともと修道
 院の物です。聖堂の広さに合っ
 た柔らかい響きを持つオルガンでし
 た。後に信者が弾くようになり、足
 踏み加減が難しくなったこの小さ
 ルガンが高幡教会でミサを共にした
 初代のオルガンということになりま
 す。一九八二年教会が建つて十二月
 献堂式の日、新しい聖堂にはヤマハ
 のフルペダルチャイチェオルガンが置

かれていました。これは音楽家でも
 ありご自身がオルガンを演奏なさ
 ていた初代の神父様が、信徒のお一
 人から寄贈された物だと伺いまし
 た。六年後、神父様は転任で高幡教
 会を去られました。オルガンはそ
 のまま聖堂に残して下さいました。
 これが、初代のロワゼール神父様か
 ら幸田神父様、ルイ神父様と、晴佐
 久神父様まで二十年の間、教会が使
 わせて頂いた二代目のオルガンで
 す。その間、結婚式の途中で突然に
 音がならなくなるなどの不具合が生
 じるようになり、新しいオルガンを
 購入するようになった。それは教会創
 立三十周年を祝った後の二〇〇二年の
 ことでした。晴佐久神父様を長に、信
 徒会委員長、施設、会計、典札の委
 員にオルガン奉仕のメンバーが加わ
 り、約一年をかけて購入の準備をし
 ました。資料を取り寄せ、予算を組
 んで、機種を決めるまで全てが初め
 ての事なので時間も努力も必要でし
 た。最終的に二社に絞り、目当ての
 オルガンを使っている教会を尋ねて
 一緒にミサに与り、試弾をさせても
 らい、響きを確かめて、オランダヨ
 ネス社製のカワイチャイチェオルガ
 ンに決めました。これが教会で使う
 代目のオルガンになります。
 この機種を選んだ理由は、内蔵さ
 れている音源がヨーロッパ各地の有



ミサを共にしている現在のオルガン

名なパイプオルガンからリアルタイムで収録されていて、音がきれいなこと、音も仕様も高幡教会の広さや造りに丁度よいと思っただけです。アフターサービスが受けられることも確認しました。カワイの担当者も開口教会に所属する方で、試弾先の教会との交渉など誠実に果たしてきて、熱意を感じた事も理由の一つです。

設置するに当たっては、音を均一に響かせるための外部スピーカーの設計から製作取り付けまでを音響の専門家（高幡教会所属）が担当しました。取り付け完了はオルガンに三

ヶ月遅れて二〇〇三年四月、そして待望のオルガンは二〇〇三年一月三十日に教会に搬入されました。初ミサは二月二日で、この日から今年二〇二三年四月三十日のミサまで二十年と三ヶ月を一緒にミサに奉仕してきましたこのオルガンのメンテナンスの記録から、一番重症だったのは二〇一七年秋、オルガンの心臓に当たる部分に不調が起きた時でした。全く音が出なくなり、キーボードを使ってミサをしていた時期がありました。色々処置はしましたが、結局は整流器を新しい物に交換する手術が行われ、完全に復活したのは次の年の五月でした。二〇二二年二月には呼び出して鳴らないストップを九つ見つけ、ミサで聖歌を弾くにはさほど困らないものの、またあの大きな不調に繋がってしまわないかという不安がありました。応急の処置はしましたが、電子部品についてはまだ不具合が生じる事があると診断されました。

二〇二二年度の委員会はオルガンの買い替えを決め、八月にはプロジェクト会議が持たれ、ホルへ神父様、宮下神父様、典礼、施設の委員、カワイ楽器の担当とオルガン奉仕グループで買い替える機種、購入のため新しいオルガンの機種、購入のため献金についての話し合いがなされました。

四代目の機種はヨハネスエクレシ AT150、三代目と同じカワイのチャーチオルガンなので外観は殆ど変わりませんが音についてはさらにグレードアップしていると思えます。スピーカーの仕様は変わりましたが、載せている台は三代目ヨハネスが使っていた物です。この台の前面 St. モニカのプレートがついています。三代目のオルガンを引く時、誰よりも積極的にチームを引っ張ってくれたモニカさんは、二月二日の十一時ミサでこのオルガンをたった一回弾いただけでその月のうちに天に召されてしまいました。「モニカ」と愛称で呼んでいたオルガンは役目を終えて引き取られていきました。新しいオルガンが来たことを喜んで、新しいオルガンを引くことに居て、教会は創立五十年を過ぎて、その先を歩み始めました。これから変わっていくところも変わらないうちもあるでしょう。日曜毎のミサを支えるオルガンも教会の歴史と一緒に辿っていくのですから、どんな事を感ず、どんなふうに入力していくのかと、分身のように思っています。アが教会の祈りにびったりとくっついて大切にしてこのオルガンが使われる事を願っています。